

シーボルト研究史における呉先生

箭内健次

医史学の分野における呉博士の最大の業績はいうまでもなく「シーボルト先生―其生涯及び功業―」であるが、同時に又日本におけるシーボルト研究は博士によって開拓され基礎づけられた。その学術的価値は今日においても何ら変るところはない。博士没後五十年の今日、改めて大著「シーボルト先生」の著作の意義と、その後のシーボルト研究の推移を概観し、その研究史的意義を考えてみたい。

博士のシーボルト研究の動機については一般的に言われるように富士川游博士らと共に始められた医史学研究の過程において生まれたものであることは勿論であるが、富士川博士が主として医学者の伝記、医史学の分野の研究に沈潜されたに対し、呉博士は早くも明治二十五・六年の助手時代にシーボルトに注目し、明治二十七年の初め中外医事新報に「シーボルト翁の伝」を發表し、ついで二十九年二月には「シーボルト」を著わされた。刊行の経緯については同著の序文及び佐野常民の題辭に明らかであるが、その構想は医史学の枠を遙に超えた雄大なものとなっている。この大綱は後年大正十五年刊行の「シーボルト先生―其生涯及び功業」に殆んどそのまま引きつがれている。もとよりシーボルトの日本における活動を詳細に且総合的にとり上げてはいるが、単にそれにとどまることなく、ヨーロッパ人の日本來航の事情から説きおこし、日本における蘭学發展の足跡から彼の行動をとりまく諸般の政治情勢、更に帰国後再来に至る経緯と開国日本とのかかわり合いなど広範囲に敘述を試みるなど総合的視野の下に為されすぐれた文化史研究となっている。そこには医史

学的敘述は全く見られない程である。吳博士がなぜ早くよりシーボルト研究に関心を抱いたかは第二版のはしがきにも述べているように日本の近代化に果たした蘭学者たちの苦難の道を迎えるとともに、シーボルトとのかかわり合いに思いを致し、その中に図らずも生じたシーボルト事件の真相を明らかにしようとしたものと考えられる。博士がこの事件についての論稿を「史学雑誌」に発表され、さらに第二版において十一章にわたってこの事件を詳述されているのはシーボルト研究における関心の深さを物語るものといえよう。更に本版に付せられた「乙篇」と題する史料篇に約二〇〇ページを本事件関係に宛てているのはこれが洋学史上に占める役割の重要性を認識されたからに他ならない。

吳博士はシーボルトのほか日本に來朝したヨーロッパ人としてケンプエル及びメイランについて若干の業績を残されている。ことにケンプエルについてはその著述の中の「江戸参府紀行」の部分について極めて詳細な註を付して訳述しているが、ケンプエル自体については殆んど研究された痕跡はない。又メイランについてはその日蘭貿易史の訳述の草稿が残っているにすぎない。これら二人についての訳業は何れもシーボルト研究の成果から派生的に出版社の依頼が動機となつて生れたいわば副次的な産物と考えられる。想うに博士のシーボルト研究は近世日本に芽生えた医学を中核とする蘭学研究のもつ近代性の内面をシーボルトという人物を中心に据えることにより明らかにしようとしたものであろう。そのことは病没せられた三年前にドイツ文で執筆された「シーボルトと彼の日本文化への影響」と題する論文の中にも強調されている。シーボルトは博士のもつ問題意識の究明には理想的人物であった。彼が単なる医師としてではなく、万有学者として又オランダ政府の抱く新たな東洋政策の推進者として期待以上の活動を日本において展開したことは博士にとり極めて大きな魅力であったに相違ない。博士はこの人物の行動の究明に最大の情熱を傾けたものではあるまいか。シーボルトが日本の総合的研究計画を進めるにあたって採用した巧妙な方法——即ちいわゆる門人の成果を出来る限り撰取し、それに自己の觀察結果を採り入れて再編成する方法——に博士は多分に共鳴されたように感ぜられる。博士がシーボルト研究を進めるにあたって夥しい人々に協力を求め、教示された成果を著書に採り入れたことは例えば現在医学文化館に架

蔵されている博士著書の草稿本と協力者からの書簡を見れば判然とする。又ヨーロッパの現地にあってシーボルトの長男の案内を得たことなど限らない協力を求めつつ研究を進めたのである。

次に日本におけるシーボルト研究の系譜を辿り、その中で呉博士の研究の位置づけを考えてみたい。明治以後の日本において学術史の一環としてシーボルトを採り上げたのは前述の 一八九四年（明治二十七年）中外医事新報に発表された呉博士の「シーボルト翁の伝」が最初であったことを特記したい。これが機縁となつて九六年にはシーボルト生誕百年記念としての「シーボルト」が刊行された。本書こそ我国におけるシーボルトについての始めての総合的研究であり、以後の研究の基礎をなすものであった。

想うに明治維新以降日本の近代化が西欧文化の移植を中核として進められた過程の中で、それに貢献した欧米人に対する評価の風潮がたかまり、シーボルト顕彰の動きも又長崎を中心に起こつた。しかし彼についての学術研究は呉博士を以てその始めとする。以後研究史を辿ってみると、先ず気付くのは記念事業との関連である。すなわち、シーボルト生誕百年の一八九六年には祝賀会とともに呉博士の「シーボルト」が刊行されており、一九二三年の日本渡来百年にはこれを記念して長崎において「シーボルト先生渡来百年記念論文集」が計画された。この中で呉博士も「医学者としてのシーボルト先生」と題し一文を草されている。（尤もこれは同年の関東大震災のため刊行は二四年であつた。）又一九六六年には没後百年を記念して（ケンプエル没後二百五十年と合同して）ドイツ東アジア研究協会（O・A・G）が記念論文集を刊行し、それぞれシーボルトの日本研究業績を讃えている。しかし日本におけるシーボルト研究に一大転機を劃したものは一九三四年当時ベルリンの日本学会に架蔵されていたシーボルト関係の文献が多数日本に将来された事である。それまでの研究が殆んどその著「日本」「日本植物誌」「日本動物誌」という刊本に依拠するか、又は日本における「門人」を通じての個別研究が中心であり、啓蒙的傾向が濃いものであつた。これに対し将来された文献は殆んどすべて原史料であり、右三著作の編纂に用いられたものが大部分であつた。元より近年ドイツのハンス・ケルナー教授の指摘するところよれば、在ベルリン

日本学会所蔵のシーボルト文献は在欧関係文献の一〇パーセントにも満たぬとはいえ、人文・自然兩分野の研究者による原史料に基づく総合的調査によって、シーボルトの日本研究の基礎作業の実態が始めて学界に紹介されたのである。その成果として一九三八年刊行された日独文化協会編「シーボルト研究」は研究史上劃期的なものと評価しうるであろう。そこには呉博士によって為しえなかつた分野が開拓されたのである。シーボルト文献の日本将来と展覧会、講演会など舉行されたのを機にいわゆるシーボルトブームを捲きおこした。ジャーナリズムには夥しいシーボルト関係論文が発表されたが、やがて太平洋戦争の激化とともに鎮静した。この時代の文献としては京都のドイツ文化研究所においてシーボルト委員会の名で一九四四年刊行された「シーボルト論攷」を挙げるにとどめる。これは同研究所が日独文化協定の趣旨に基づき両国間の学術関係の振興のために計画された。巻頭には呉博士の「シーボルト先生」の独訳の立案者であつたトラウツ博士の論文を中心とする第一冊が刊行されただけで終つたようである。

戦後におけるシーボルト研究は依然として蘭学史の一部として又外人の日本研究の中の一コマとしてのものが大部分であつたが、その中で代表的研究としては一九六〇年に板沢武雄氏が人物叢書の一つとして「シーボルト」を執筆されたことである。板沢氏は歴史学者として日蘭交渉史・蘭学史を初めて系統的に研究した学者であり、さきのシーボルト文献將來の際組織された総合的研究会に歴史学者の立場から参劃された。本書は呉博士の「シーボルト先生」の成果に準拠しつつ特に乙篇に収められた史料及び日独文化協会の「シーボルト研究」と更に同氏がオランダ国立古文書館で採訪した文書を織り交せて平易にシーボルトの伝記を敘述している点に特色があり、叢書の性格から専門書というよりむしろ啓蒙的性格の濃い著作といえよう。史料篇を含め一五〇〇ページという浩瀚の故に一般読者に近付き難かつた呉博士の大著に代りシーボルトの人物像を広く流布した点も又評価すべきであらう。

一方原史料に基づくシーボルトの日本研究については戦前の日独文化協会による総合研究以後久しく行われなかつたが、図らずも一九七七年に至り試みられた。これは七五年講談社より「日本」の複製本が刊行されたのを機会に「シーボ

ルト「日本」の研究と解説」と題して刊行された。元より本書は書名のごとく「日本」の解説の形をとり、本文の章節に従って解説と研究が行われたものと、それと関連して全般的シーボルトの書誌学的研究が試みられている。この中で特に注目すべき論文は藤田喜六氏による「日本」出版の経過を明らかにした研究である。「日本」が分冊形式で二十余年にわたって発行された結果、その内容がどのような編纂意図を以て刊行されたかその順序については殆んど知られていなかった。同氏はヨーロッパ各地所在の関係文献を調査した結果、これが二十分冊を十三回に分けて刊行した事、又各冊所収の内容が明らかになった事、又更に二回配本を予定して遂に実現をみずに終った事などの新事実を明らかにされた。この事はシーボルトの日本研究の深化に大きな寄与をなすものであった。又各章の解説についてもそれぞれの専門家により新見が豊富に加えられ、旧説は大きく補正された。なおこれと関連して特筆すべき事は一九七七年より二年にわたり雄松堂によって「日本」の全訳が計八冊を以て刊行された。従来シーボルト研究の前進を妨げた一因としてその「日本」が膨大であり、その上貴重本で個人所有が困難であるばかりか架蔵する研究機関も極めて限定されていたことを挙げるべきである。一八九七年に息子のアレキサンダーとハインリッヒの二人によって「日本」の再版が刊行されたが、これは初版と比べ内容が甚だ簡略化されたものであった。今ここに初版本（再版本の一部を含む）を基にした邦訳が実現したことは前述の「解説と研究」と相まち我国におけるシーボルト研究を大きく躍進させることになったのである。我国のシーボルト研究は呉博士の著述刊行の第一期と日独文化協会による第二期を経て今や第三期に入ったといえることができる。

以上明治以降日本におけるシーボルト研究の跡を辿ってみた。そこにみられる特徴は一貫して呉博士によって提起されたモチーフによって展開されていることである。すなわち、日本の近代化との関連においてシーボルトの行動や役割が強調されている。そのこと自体極めて価値あることであり、そのための努力が第二期、第三期を通じて行われており、かつなお未解決の問題が多く残されていることは事実で今後更に徹視的に研究されなければならないのは当然のことである。しかし同時にシーボルトをとり巻くさまざまな環境についての研究を更に進めねばならない。例えばシーボルトの日

本滞在中の（再渡來の時期をも含めて）日本の国内の政治的社會情勢との関連と影響についての分析、更にドイツ人としてのシーボルトとオランダ日本商館員との問題、更にヨーロッパにおけるオランダをめぐる國際情勢についての詳細な分析などなお考究すべき問題が多く残されていると思われる。シーボルトの行動についての感情的評価ではなく徹底した科学的評価が為さるべきであらう。その意味で本稿脱稿とほぼ時期を同じくして發表された永積洋子氏の「ドイツ人シーボルトとオランダの学界」（思想）一九八二年第七号」と題する論文は今後のシーボルト研究の新しい方向を示すものとして評価すべきであらう。

新しいシーボルト研究を模索するためには当然のことながらヨーロッパとくにオランダ及びドイツにおけるシーボルト研究について論じなければならない。しかしこれは現在の筆者の能力を超えた問題である。ただ若干触目した研究を通じてみる限りシーボルトは、ヨーロッパにおける「日本学」研究史の一環として採り上げられ日本における場合とかなり相違しているように思われる。その中であつて最高の評価を与えられるものは現在ドイツのミュンヘンの科学アカデミー会員ハンス・ケルナー博士の「ヴェルツブルグのシーボルト家の研究」(Hans Körner, Die Würzburger Siebold. Eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19. Jahrhunderts, Leipzig, 1967)であらう。六六〇ページ余にわたるシーボルト家の研究の中で Philipp Franz には約一四〇ページ、Alexander, Heinrich についてはそれぞれ四〇、一八ページを割いて詳細な伝記を敘述している。(尚この三人の部分については竹内精一氏によって「シーボルト父子伝」と題して邦訳刊行されている)本書は標題に見えるように名門であるヴェルツブルグのシーボルト家代々の家系史を明らかにする目的で執筆されたもので、単独の伝記ではないが、主としてドイツ及びオーストリアの現存史料を徹底的に渉猟して執筆されており、現在のヨーロッパにおけるシーボルト研究の最高峰といふべきであらう。同書中呉博士の著書も引用され、批判を加えている。(例えばツェッペリン伯家蔵史料の未利用など)しかしこれは執筆の立場も異なり、非難するには当たらない。むしろ本書によってヨーロッパ学界におけるシーボルト研究の一端を知ることができる点でも有益である。このほか一九七八年にはオランダライデン大学の日本

研究センターでシーボルトをめぐるシンポジウムが行われ、その報告書が刊行されており、最近では（一九八〇年）ドイツのボン大学での日本文化研究所創立五十周年記念事業として「中欧の美術館・博物館・図書館所蔵の日本コレクション——その歴史と現状——」と題する日本学セミナーが行われ、その中でケルナー博士やフリーゼ、オプスタル、グーリックその他各国の学者によってシーボルトに関する文献の紹介や研究の一端が発表されている。（Bonner Zeitschrift zur Japanologie, Band 3. Bonn 1981）（本書については「図書」七月号に住谷一彦氏が紹介されている。）

なお個人の研究としてはさきにオランダのマック・リーン教授による科学史に関する諸論考をはじめとし、イギリスの大英図書館のユー・イン・ブラウン女史の同館所蔵シーボルトコレクションの紹介あり、最も新しくは前述のドイツのル大学東アジア研究部のフリーゼ氏による同大学架蔵のシーボルトコレクション（大部分は旧日本学会架蔵のもの）に基づくシーボルト研究が最も精緻なものといえる。

今後のシーボルト研究は日独蘭その他の諸国に存在する夥しい関係史料を基にした国際的研究が極めて必要であること
を痛感する。

（附記）

本稿執筆にあたり種々の情報を与えられた東海大学の向井晃、杏沢宣賢両氏の好意に対し謝意を表する次第である。